

椿説弓張月

殘篇



~13
3908
28



13
3908
28

鎮西八郎 椿説弓張月残編卷之四
為朝外傳

東都 曲亭主人編次

第六十四回

情人を刎て紀平治隠慝を懲る
頭髻を剪て舜天丸孝順を全る

汝も出て汝も返れ因果の理の今こそ母阿公が懺悔によりて王女ははじめて
王子のうへを奉詳おぼせり或る驚れ或る歎れあひひまやまの
王子と名をあらはれし毛國典が子ならんらん廢莫被國典が先祖ハ
天孫氏十八世琥珀王より出れり金枝玉葉と稱せられ國家ふはらへ
棟梁のほはけはむその由緒あり先玉お男見まはさねハ同姓の児
養ひて位を譲り多きもその水原の甥もあはれ一旦世に経君を
期に王子と稱せし罪をわりのとも存命てふあらん亦せり

春説弓張月残編卷之四

善悪もあつぬ釋子を只一刀の刺殺せしは只顧先非の後世に
 始終を正し入され阿公が恨みは恨をかきしとまきのまてもう
 までつらうがましかりひけれ今さら外の志られよあつぬ主後と
 いひながら毛國典親子のつらうけ恩多うその忠孝も宥めても
 命を助けせんといし痛きまうつらうねとらう漣河もひらうが鶴電も
 臉を押しひ母新垣ははもどれ齡四十にちうして有才とらう公うけ
 陰陽師ふらせのハ出生の子ハ男也といと貴うはげしと年ハ十ハ
 満じて横死とせりといとてその掌を指して説示されていしとまてく
 公のかれども父も終て告げしと母の末期のおうり只假初おま
 してその多せ博士が虚言するんあうらふ苗めあうといし慰め
 八年のむし多しあつとねト並のいと誣うと推子を見とらあうら

贈りしも連る枝の誠をのびに電をさ入懐妊とも遂ふその死を救ひう
 て漣河とれ面殺うまは目ふといゆるとかれ口説外へいしう袖の雨うその
 虫と唧也と為朝頻お嗟嘆して幼稚りのハ智の聖罪を糾とふしと
 はし只阿公が奸曲とその罪放しおしといども賞とべれりあはし
 ぬら故いふとなれは彼その孫を王子と流り南風原の城は籠りて
 六年が間山南者どらりもあつぬはこそ民今小天孫氏の後あつと
 りて嗟雲逆意と振ふといども竟は山南と集ひおししその切一
 又為初うまにどりて當初阿公が紀平治地と贈りしこととらう
 君父の命なりとも頼くこととらう潜ひおしと務を捕獲てあつぬやその功
 ニつよりて阿公が亡骸と跨亀おしとをべけれは幼稚れおが死とも
 葬りて跡吊りしと町噂小説論しとらう跨亀の容とあつぬ

春の日記の長...

深く恩惠は博りては、かゝとされ、某同胞の祖母阿公は、傷はつたが、
 律に考れば、その罪脱まがじ、以て免を蒙りて腹を切らん、あつても果を
 賜ふ、自殺せんとす、経を舜天丸多ふ、推禁も迷へる、形鶴亀汝達を
 と、免阿公を、外祖母ありと、経てあつた、あつた、故にこれに傷く、まじ
 則ち、子なり、かくてその祖母あり、あつた、至りて、みづから罪お死ん、
 別、頃孫あり、かれハ罪あり、似て罪なし、と、いふも、あつた、道理とつ、まじ
 可惜玉、瑾あり、か、如、ん、あ、れ、目、今、同胞の頭髪を剪て、その死に代る、
 孫を、替ねんと、庶幾、阿公が死も、狗死な、ん、孝子、頃孫の、志も、強て、奪ふ、
 母、土、く、く、ん、ん、刑罰と、刃と、抜て、勢、龜、の、鬚、と、忽、地、井、と、剪、捨、く、多、へ、
 足も、母も、為、朝、親子の、仁慈、お、感、涙、禁、め、を、陪、と、さ、ら、あ、つ、の、孫、と、
 救ひ、う、み、れ、紀、平、治、が、救ひ、ま、さ、つ、あ、つ、て、今、と、限、の、阿、公、お、は、

ろひ、お、掌、と、合、一、彼、首、足、首、と、伏、拜、し、若、く、は、さ、こ、そ、と、八、町、磔、の、臨、終、
 と、く、て、刃、を、刃、お、頭、を、ら、ち、落、せ、ん、是、期、ハ、あ、つ、も、今、ま、つ、あ、つ、ら、
 の、闇、お、夜、の、鶴、細、輪、の、田、井、お、鳴、く、龜、も、共、お、焼、う、る、ひ、り、結、尾、
 お、阿、公、が、毫、下、の、野、伏、東、紀、南、吉、塚、造、紅、衛、本、の、数、十、人、古、廟、の、背、
 より、ま、出、て、ま、地、上、お、拜、伏、し、某、お、元、末、名、も、な、れ、仇、武、者、あ、つ、り、
 とも、曩、ハ、大、将、軍、に、後、ひ、な、り、長、川、の、敗、軍、を、辛、く、て、必、死、を、脱、れ、
 り、の、ど、も、あり、大、お、軍、に、夫、婦、の、く、く、く、く、軍、師、先、鋒、の、両、将、も、
 討、死、し、ま、ひ、ね、と、安、え、し、く、の、城、山、へ、脱、れ、入、り、ま、つ、ら、れ、も、阿、公、が、王、子、と、
 する、冊、に、て、關、鑊、樹、谷、お、隠、れ、を、る、名、告、あ、つ、王、子、お、後、ひ、な、り、
 口、を、鯛、あ、つ、は、し、な、く、て、山、客、野、伏、と、な、り、て、め、ひ、き、あ、つ、お、目、今、山、の、尾、
 崎、より、ゆ、り、ま、つ、阿、公、が、今、般、の、讖、悔、物、と、ら、り、て、竊、せ、て、は、し、ま、つ、王、子、

春入紀月長月合遺篇下巻卷之四

三二

尚寧工の死に於ては、是れはしを覚り、且大將軍王女の死に、
 天の明らむるやうにあらせしむるを、
 朝ひとて、その名を、
 先鋒の大將鶴亀とて、
 宜壽平朝安策とて、
 首を刎んとて、
 山林に脱ぎ、王子を後ひて、
 行ひと、
 頭ひ擡仰、
 郎堂、
 阿公、

のどむを認め、
 を熟えて一切、
 定め、
 中々、
 落武者、
 遣して、
 殺して、
 謀を、
 流石、
 侍、
 越を、

春兎弓長目合遺書下失卷之四

標の入りたる鱗形の割符の。加以その身甲も矚雲が袖織を著して
ければ衆皆駭然として舌を巻れ舜天丸の聰明睿智を感ぜられたりの
かうりけり。當下為朝へ東紀堤造亦が忠義の心を失つて。さうまの
聚るを賞して夥計の野伏いくむらぬれと問ふ人へ東紀ホ答まう
今ここのりの僅ふ五十八人この餘國吉奥山るんとお懸れたる者二百
五六十人もめづるといふ王女これを貸てぬく故に。按司との宮社お詣り
勢亀亦も環會又招きとして三百人の兵士と召入り。さう天孫氏の冥助
かかれへ。祝ひも人へ為朝古廟とや拜々人誠あると知られ。神
の祐あり。あられも夥血と流して社頭と穢せしめいともかとし。紀平治
龜ハ王子阿公ホが死骸を瘞てその汚穢を除け陶按司とてさうま
代りて。よろとびの幣と進じし人今もや天も明さんと知られり。

王女舜天丸をおて直ふ鬮鏝樹谷へ赴れ阿公が隱宅あり。各位は侯
るれり。さうとて懸く徐やうも階の板をわり立ちひて野伏十人を
ぞめて社頭の鮮血を洗ひ流さし東紀堤造亦も導はして親子二人
めりともお鬮鏝樹谷へ赴れり。天をわめく。明あけり。

第六十五回

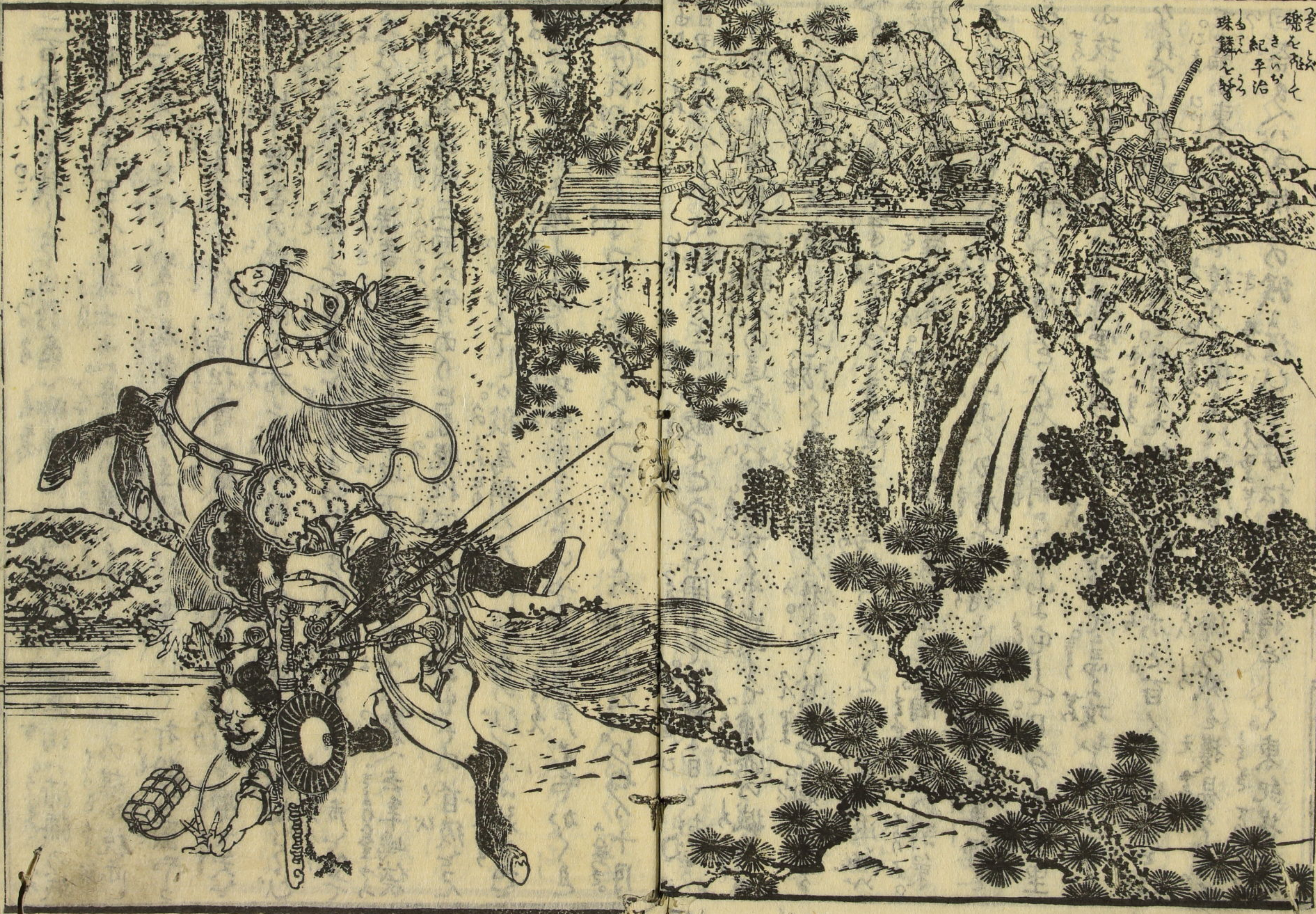
賊將を斬て林太夫兵糧を贈る
靈箭を發て舜天丸矚雲を射る

為朝親子ハ鬮鏝樹谷へ空廬入り多し。且くして紀平治松壽
勢亀も十人の野伏をおて。さうまのりもにぬりす。此日お
東紀堤造亦を遣して夥計の野伏を招けし。四五日ぐら
さう城山へあり。衆ひらば。その志を賞美して一脯の肉一枝の果も
士卒もつらさし。多し。その仁心も感佩して。鋭氣をばめり。

かくて為朝親子ハ紀平治松壽彦龜中を集合てその軍略ハ同
 目ハ八町礮まじりてやうにやう。つる君俄頃ハ三百の兵士とほども
 矚雲ハ賊兵ハ比且ハ九牛が一毛なり。且この山ハ首里ハ近ハ矚雲
 ちやくあれをちやくん先ハとらへん人々を征ハ後々ハ人ハ行せ
 らる。思慮ハ費ハば違ハハ三百餘騎を二隊ハつら大里真和志の
 山間より長く驅てふく進ハ短兵急ハ攻めハ備ハ賊の軍兵一
 戦ハ滅ハたし。さく軍配ハ多ハとさめやうせん松壽あざく尋思ハ
 老人の異見ハのはしあれおれども賊ハ大勢ハ小勢進退嶮岨ハ
 憑心ハ急ハ首里ハ攻入リハ両陣相挑ハとくハ何をりて
 兵糧ハ給ハき矚雲ハ。つる士卒の餓ハるをあることあらハ兵とて
 皆より襲ハ替ハ替ハんかくてハ始終の善東ハあハ只ハの山ハ化ハし。

首里を攻ハんとハ勢ハを示ハ敵ハこハと困ハて矢戦ハ日ハおハ
 その隙ハ大將軍ハ百餘人の選兵をば浦添ハ山越ハて浦添の城
 多ハ矚雲前後ハ敵ハ受ハて防ハ術ハ人ハ欲ハく覺ハて廻ハる
 づりや。と憚ハるや。さく世ハ為朝ハつぐとらハて進ハハ
 易ハく退ハく難ハ。舜天丸ハ何ハと。陶松壽の計策
 ちやくれハくともハハ山ハ。母君ハ大將ハ。陶按司ハ軍師ハ
 ちて兵士二百餘人を残ハ。ハ為朝ハの山ハ。日ハ。首里
 小攻ハ。と風声ハ。矚雲ハ。ハ。攻ハ。ハ。ハ
 されハ。その隙ハ。父ハ。舜天丸ハ。紀平治ハ。鶴龜ハ。百人の選兵ハ
 て。竊ハ。東の山路ハ。獲ハ。土備ハ。討ハ。浦添の城ハ。獲ハ。易ハ。ハ
 回答ハ。ハ。為朝ハ。の。後ハ。王女松壽ハ。大將ハ。東紀。

春説弓張月拾遺篇下帙卷之四



磯を越へ
紀平治
珠鱗を討つ

春説野長月合續筋下巻之四

才言正馬片打逆着下帳巻之四

二百餘人を残りしむ。落龜と御導と。為朝父子紀平治八浦添の城
を取らんとして。百人の兵士を八舟嶽の麓へ入りあててその謀を脱示
て。二人人つ起行し。翌日為朝父子主従いと宴しく打扮て密に
あそとら出るふさう。行ふ陶松壽の紙を継て想とるし。竹を剪て矢と
別し。山中要害の地は陣を布て夜に駈く。無と焼し。為朝好くび
城山へ我兵を起して。首里と攻るといひし。されば。矇雲との風声と
丈は驚れ棟孫奇律之全廣以下。の賊將を皆び聚へ去牟嶋袋
の火攻。為朝三百六臂のりとも。脱れぬと。おり人ども。その首級と
さし。かば。ぬく。公。お。か。し。が。彼。為。朝。ハ。死。せ。し。て。あ。の。び。く。み。残。黨。を
招。れ。集。め。既。に。城。山。に。屯。り。て。攻。め。さ。す。と。い。ふ。あ。れ。風。声。と。や。か。く。と
な。げ。れ。は。汝。も。さ。つ。つ。人。志。う。れ。ふ。つ。や。く。さ。ら。ほ。が。さ。ら。い。ら。る。十。月

為朝夫婦が存亡定らざれば比より。その往方とあらんとく。こが
千里眼を睜し。とも雲霧なごの掩ふやうぞ。絶てこれをとらふは
ま。顧。る。朝。を。隱。形。の。術。を。汲。め。れ。致。さ。し。け。れ。彼。大。助。体。り。の。つ。か
術。の。巧。く。も。や。あ。ら。ん。か。と。は。萬。り。が。た。敵。あり。這。奴。は。勢。の。た。る
が。け。間。に。棟。孫。全。廣。と。大。軍。を。お。く。馳。向。ひ。短。兵。急。に。攻。は。し。て。塵。を
せ。ま。実。言。塵。を。い。ち。し。ゆ。も。為。朝。が。子。小。舜。天。丸。と。呼。ば。れ。て。智。謀。お。そ。し。れ
小。冠。者。あり。又。八。町。礮。と。う。つ。少。總。中。名。次。好。一。老。堂。あり。と。と。経。な。な
漏。し。し。と。脱。示。せ。ば。兩。箇。の。賊。將。さ。ら。ら。好。果。て。千。五。百。騎。と。引。卒。
次の日首里を軍旅して長川をうら渡り城山へ寄る。行ふ。王女
松壽の関の声はも合さざるまうに敵を引はし二百餘の兵士
下知して一度小数百の大石を八落とくと投落させれば賊兵次第は

打殺さるゝの二三十人傷けられり。その数とちふはすの八町
 礫よといふ程こそわれ大軍一崩れ落ち一里あき川退れて
 西二日の起はるゝのまう。棟孫全廣ハ為朝の軍配悔ぶとて
 ちねふ舜天丸の智謀紀平治が礫よとておぼしてその後をかくし兵
 をとめて山中殊は礫よとて敵のまを極めかく。岡の声の
 礫よとて数千騎奔るがごとくはえしう。あましく首里へ遁馬と飛して
 加勢の兵とこよけれが礫よとて安くぬる。いふやうに。あま
 馳向ひて暗結んとしれすまて。あがて出陣の准佐とぞあまのり。かじ
 行は為朝舜天丸の紀平治鶴亀りともよ夜ゆれ昏の宿り。中
 弁嶽の麓まで来たひいへ。主後石小尻をうけて跡よりまのり
 兵士とまらま折ら。忽地汗馬は鞭をぬびて北より南へ走るとれ

りののりけ。舜天丸これを目送りて彼騎馬ハ山南者へ急と告る使者
 なるべ。引捕へるが縁由と。あまのりもあまのり。やと宜ふと為朝の使者
 めんど。あまのりもあまのり。走れとて。あまのりもあまのり。あまのり
 紀平治つと身と記。あまのりもあまのり。あまのりもあまのり。あまのり
 とあまのりもあまのり。あまのりもあまのり。あまのりもあまのり。あまのり
 て礫よより。仰さぬあまのり。あまのりもあまのり。あまのりもあまのり。あまのり
 町礫と渾名せしこと空か。あまのりもあまのり。あまのりもあまのり。あまのり
 走りのゆれ押へて素衣を被ら。あまのりもあまのり。あまのりもあまのり。あまのり
 かくれ。あまのりもあまのり。あまのりもあまのり。あまのりもあまのり。あまのり
 亀ハ半死半生のれ騎馬武者と引立てま。あまのりもあまのり。あまのりもあまのり。あまのり
 その末歴を責問あまのり。あまのりもあまのり。あまのりもあまのり。あまのりもあまのり。あまのり

浦添直野湾の西城の首里の咽喉なるをりて。とす。兵士とす。加へく。

せざるを。あづく。回れて。己とて。其の浦添の筑登之小珠鱗とて。

りのまのら。八郎為朝再生して。城山へ角銃の目今合戦の最中。とる。

浦添直野湾の西城の首里の咽喉なるをりて。とす。兵士とす。加へく。

由断なく。ちうと。と。喙雲法王。不知い。多入の浦添の按司伯糾某と使と

て。佐敷の按司。催促し。加勢の兵士と。呼び。聚る。の。この舟。舟の仔細

な。し。と。い。ふ。為。朝。父。果。て。冷。咲。ひ。それ。も。ま。げ。け。が。這。奴。も。用。戸。し。刃。の。暇。を

と。い。せ。よ。と。宣。へ。ら。り。け。り。と。回。答。も。あ。く。と。紀。平。治。が。閃。と。刃。の。下。に

珠鱗が首へ膝のむうひへ撲地と。落。驅。り。共。よ。倒。れ。り。洪。怒。と。南。吉。紅。衛

ら。ホ。百。人。の。兵。士。二。三。人。つ。走。著。て。その。日。の。中。小。集。合。し。う。が。為。朝。これ。も

集。を。説。示。し。百。人。が。中。で。珠。と。珠。鱗。と。似。る。を。擇。と。彼。が。衣。裳。に。被。せ。て。馬

小。乗。し。為。朝。父。子。鶴。亀。同。胞。紀。平。治。亦。も。抗。登。之。小。打。扮。て。主。後。と。て

百餘人。只。管。道。を。い。と。ぶ。し。つ。その。夜。中。の。地。及。は。浦。添。の。城。に。走。着。件。の

假。珠。鱗。と。先。小。と。て。城。門。を。敲。き。佐。敷。より。加。勢。の。軍。兵。と。誘。引。ま

ま。り。門。を。開。き。て。入。れ。ま。し。と。喚。れ。ば。城。の。兵。城。樓。の。扶。間。より。こ。ん。ん。こ。ん。こ

より。遣。り。たる。使。者。珠。鱗。の。馬。を。乗。り。月。下。に。ま。り。疑。ふ。べ。う。も。あ。ら。ざ。れ。ば

越。之。城。門。を。推。開。し。て。諸。軍。兵。を。招。れ。入。れ。り。為。朝。父。子。の。既。再。二。の。城。門

を。越。り。入。り。城。の。大。將。按。司。伯。糾。出。迎。へ。ん。と。と。る。折。々。ら。城。中。俄。頃。騒。々。と

佐。敷。より。兵。大。將。引。来。り。使。者。の。珠。鱗。の。質。物。の。由。お。し。り。と。す。と。い

つ。れ。ば。伯。糾。大。將。お。ど。ろ。ろ。と。走。り。入。ら。ん。と。と。る。処。を。為。朝。刀。で。引。技。ま。さ。く

跳。り。鬼。て。伯。糾。の。首。と。丁。と。撃。ち。と。し。大。里。の。按。司。源。為。朝。こ。も。あ。り。城。の

賊。兵。命。惜。く。降。を。あ。せ。よ。と。喚。り。多。入。の。後。卒。百。人。関。の。声。を。仰。り。う。け。舜。天。丸

紀。平。治。鶴。亀。の。縦。横。を。尋。ね。お。砍。て。廻。れ。ば。城。の。兵。士。驚。れ。騒。り。て。防。比。戦。人

浦添直野湾の西城の首里の咽喉なるをりて。とす。兵士とす。加へく。

九

風のつらうてあふう入漕よさることかたりのぞかして何の日は泊の西濱へ
 とばた。と公の三焦燥よりける。一昨暴風波荒れてねどもさう覆へ
 とある折神の祐させりあふうて更一頓風をばりしうばま地ふ西濱へ
 乗るふたきうれ大將軍ハ百騎を足らぬ兵りて。や浦添の城を攻落し
 めしねとやえしうぐね底は唯はしりつ。杉木を組して車としやうて兵糧
 と積のせつ。あつて投てひしする終ふ宜野湾の賊將季蛇とやんが兵
 糧を棄んとて二三百の兵をばて城より誓て出る。血氣小勇む島人ホ
 陣法もあつた撃手術もあつたのちと替刀ははして敵と戦ひ遂に賊將
 季蛇は驚りしりけり賊軍忽地一敗れて死るりの数をあつたにむりひの
 得つて敵の遺しる弓箭刀漫まりてふねり凡此度林太夫は後ひ
 とあひの佳奇と府人のさるふに由呂島奇奴度姑嶋小琉球の嶋人ホ

大將軍と五女の仁心を景慕し林太夫が催促もあつて去らうとて
 一五一十と演説し誓りたりけれ宜野湾の賊將季蛇は首級ととり
 出て実控入れしる朝舞天丸大に成り出た。汝ホが今度の働た勇將
 武夫も及ぶる所なり。野夫も巧者めり。かゝるべきをやしのされとて
 志む。賞嘆あもひく。是よりされ咲雲のさうら城山を攻んとて既し
 うら出入とされ折る浦添の城を追落される賊兵僅小首里へ脱入。
 城を奪られし顔末と告いれ。賊雲はもりぞ大に驚け押彼朝親
 子。いづる奇術をばて出沒不測の計畧をなすや。されハ物にしてんがれ
 こころ。車にしてうさることありし。今度為朝ホが進退のこの目
 見え。この目も見えとあつた。浦添宜野湾ハ首里の咽喉なり。が
 敵もこれ取入んとこそ謀る。彼城を奪う。そのや

風をよみし。浦添宜野湾ハ首里の咽喉なり。が敵もこれ取入んとこそ謀る。彼城を奪う。そのや

旨めれば彼処は兵糧の貯せしむるに只月とにあらざる。士卒の月俸は
送り遣へば今ハその糧場をくらふ。只彼城をうち囲みて日とるに
乃智勇ありといふも餓死せざるや。かれは城山の敵へ心腹
の病はやくは為朝ハ浦添の城にありと疑ひし。しでやこれ浦添と攻
さハ城山ハおのづから落べしとてさぐ縛の越を梯録全廣は告ふし。速
長川を前よめて城山の敵を押しさす。戦を催さるるに全廣ハ
かく首里へ入りて浦添へ向ふべしといひつらけり。ついで全廣ハ日
に首里へ入りて浦添へ向ふべしといひつらけり。ついで全廣ハ日
と。ハ中軍ハ將としてその勢をへて三千餘騎既ハ龍宮城へ進
發して次の日龜山の麓に至り。且くあふ屯て敵の中りと撈同する。
向者走り入りて入りて入りて佳奇呂麻の嶋長ハ林太夫とりの

藤て為朝ハ中軍ハ將としてその勢をへて三千餘騎既ハ龍宮城へ進
發して次の日龜山の麓に至り。且くあふ屯て敵の中りと撈同する。
向者走り入りて入りて入りて佳奇呂麻の嶋長ハ林太夫とりの
日ハ昇るがごとく。六百餘騎を二隊に分ちて城山をめぐりて去る。
よりいこゆる。忽地前面なる茂林の中より一軍の人馬馳出たり。
驟雲ハ其の報知をせ。彼処の敵軍をうて心の中ハ周章車を捨て
馬より騎下。陣頭ハ馳走。前面を詰とんて。和軍忽地
左右より入つて。死す。十四五歳の美少年。真先ハ馬乗と見え
麾把て驟雲をさし。招は賊とて。取つる。の途にや。これハ足清和
の後胤。西八郎源為朝の嫡男。舜天丸。年未。姑巴嶋。漂泊して。近
属父母ハ再會。更ハその地へ伴つた。されハ父の命と尊て。將ハ誅戮

我逆劫掠の罪と糾して鳴袋の怨を雪り民の塗炭を救入とて刃と受
 よ。馬了るべハ士卒ひとしく腹を敵れて岡の馬を咄と揚天照皇太神宮
 甲山正八幡宮阿蘇明神と写し三條の白旗を山風吹塵し猛将
 虎卒数百人前後左右陣列し舜天丸の側あり白髪たる老武者一騎戟
 を横とえまゝにこれぞこの音の聞八町礮の紀平治大夫と問答とも
 あれ勇士の相貌體の威も日本様真ふ一人當千の勇敢きこみあり
 うれより。あれども矇雲の舜天丸の少年なるを悔りて何とぞ冷笑ひ
 黄口孺子が耳置れ哉言うお汝が父為朝ふふこれと雌雄と争ひぬ
 ど猛穴の包と孤島お呻吟ひ死にとぞれとくくびなるんけや生
 も走らぬあよなれ幸ひあるべし又ころごぬお虎の鬣と折んとく人
 ぞと少のいもごまねね小冠者に先とせし生さひもくは白徒なり。

誰うめ。舜天丸と生拘れと鞍壺敲て敦圍の矇雲が先登の大將耳目官
 全廣お地馬を馳よそれハ紀平治も又馬とすめて逆とらふと十合
 あまり刃を引て逃走れハ全廣ハ馬は折れ逃はしと追かゝる間とらりて
 紀平治ハ刃と反りて丁と撃礮とともハ全廣ハ馬より撞と撻ひ墮て血
 を吐くと駭し賊將奇律之これを見て渠全廣と助よと叫びつ。士卒お
 先がら馳出すが又紀平治が狙撃礮が眉間と打碎し馬より真逆さぬ
 お撻び落れハ南吉紅衛林大夫お群とと落うごありて全廣奇律之
 が首級を獲たり。されハ紀平治が手煉の礮お矇雲が憑きんんん賊將
 二騎を移さりて義兵の威勢破竹のごく大將獲をよみ人ハ賊軍
 勿心地足を乱して一嶽崩れ駭げハ矇雲もごころあつ慌て頻り咒文を
 唱とごも。幻術破れて驗なし。ごころあつとこれあもあごで忙然とご

たる心もあはれど。浩如く。驟雲が。後陣ふらふ。ひきめられて。敵まう。北背より。寄
 寄ると。叫ぶ。ね。奥の。声。夥しく。長川の。賊軍。敗れて。賊の。大将。棟。孫を
 ば。王女。さう。から。奪。とり。ひ。して。と。龍宮。城。を。り。攻。む。と。し。驟。賊。が。迹。と。追。て。
 推。し。の。ま。と。あ。ら。ざ。り。や。東。風。平。の。按。司。陶。松。壽。こ。に。あり。と。名。告。け。け。り。
 潮。の。涌。が。ぶ。と。攻。め。られ。ば。驟。雲。前。後。に。敵。を。受。て。禦。ぐ。に。と。な。り。し。勢。あ。ら。ず。
 自。方。を。こ。も。め。り。且。戦。ひ。且。走。れ。ば。朝。岡。の。ほ。ろ。り。と。亦。一。軍。の。人。馬。
 馳。走。り。落。け。し。途。を。遮。り。由。八。師。為。朝。を。こ。ん。た。れ。り。や。驟。賊。逃。れ。て。脱。げ。れ。り。
 と。叫。ぶ。け。り。雷。の。と。と。驟。雲。進。退。既。に。究。り。是。非。を。辨。破。り。と。走。
 脱。ん。と。と。朝。の。陣。中。より。鶴。龜。同。胞。馬。と。並。へ。て。逆。と。り。甲。楯。乙。袖。
 丙。烈。丁。炎。春。ホ。又。左。右。より。挟。む。と。脱。さ。じ。と。攻。撃。と。火。の。然。水。の。流。る。と。似。
 又。背。より。王。女。の。大。軍。追。蒐。す。り。箭。を。飛。と。り。雨。の。如。し。と。あ。ら。す。と。

賊兵亦或の警れ或の驅隔られて。驟雲。只一騎。より。し。う。が。為。朝。逆。に。奥。に。て。
 擇。射。し。射。て。落。し。ん。と。て。所。藤。の。弓。の。握。り。太。る。に。鷹。の。羽。の。征。天。ら。ち。
 刺。し。貫。し。う。の。死。の。上。ま。で。引。ひ。て。あ。じ。堅。め。て。丁。と。射。る。そ。の。箭。の。や。ま。と。は。
 驟。雲。の。胸。板。せ。り。と。破。と。射。り。鏃。碎。け。て。飛。散。り。為。朝。の。箭。射。ら。ず。
 缺。が。石。を。踏。く。恥。て。馬。を。彼。此。に。乗。廻。し。矢。壺。を。潜。ぞ。數。回。め。り。射。り。射。
 め。る。も。箭。の。ち。り。り。て。敵。に。た。は。上。差。の。征。矢。二。十。四。條。を。こ。り。い。と。づ。ら。
 射。捨。め。へ。り。弓。投。捨。て。嘆。息。し。又。れ。總。角。の。し。じ。より。弓。箭。放。り。て。名。
 を。ま。く。れ。實。よ。れ。甲。板。多。く。り。と。も。つ。が。箭。面。に。立。敵。を。射。て。お。と。す。べ。と。り。あ。
 した。し。され。ば。鬼。が。鳴。め。り。千。引。の。崖。を。射。て。碎。れ。大。嶋。の。數。百。騎。衆。と。り。
 兵。衆。を。射。て。沈。め。り。綴。驟。雲。の。五。體。鐵。石。を。り。て。造。る。さ。も。つ。が。箭。の。ま。さ。る。
 こ。し。の。め。れ。く。捕。お。せ。んと。焦。燥。て。馬。を。馳。よ。せ。ん。と。め。り。の。跡。無。く。た。り。

その響を率とてえ。そのついでに... 老賊不測の妖術ありんか大将... 鶴亀ハ為朝のちいともまりとあやてて... 六尺のまりの金槌棒を。水車のおとく揮き... 或ハ骨砕け。腦黄出る... 鳥雲雲が頂の上小掩ひて。その次女と隠し。前ハあるとすれば... 隊ちの、涼痕負さるるに。去れども活龜ハ一歩も退くを困らぬ

あつ君の仇家の為あつ父母の仇とて... 嘯雲に怒怒とて... 刀尖より火を出し。命をとりと戦ふ... 鶏の丸の宝劔をうち振て... 宝劔の威徳もやあつ... 舜天丸ハ姑巴嶋あて三所の神ハ...

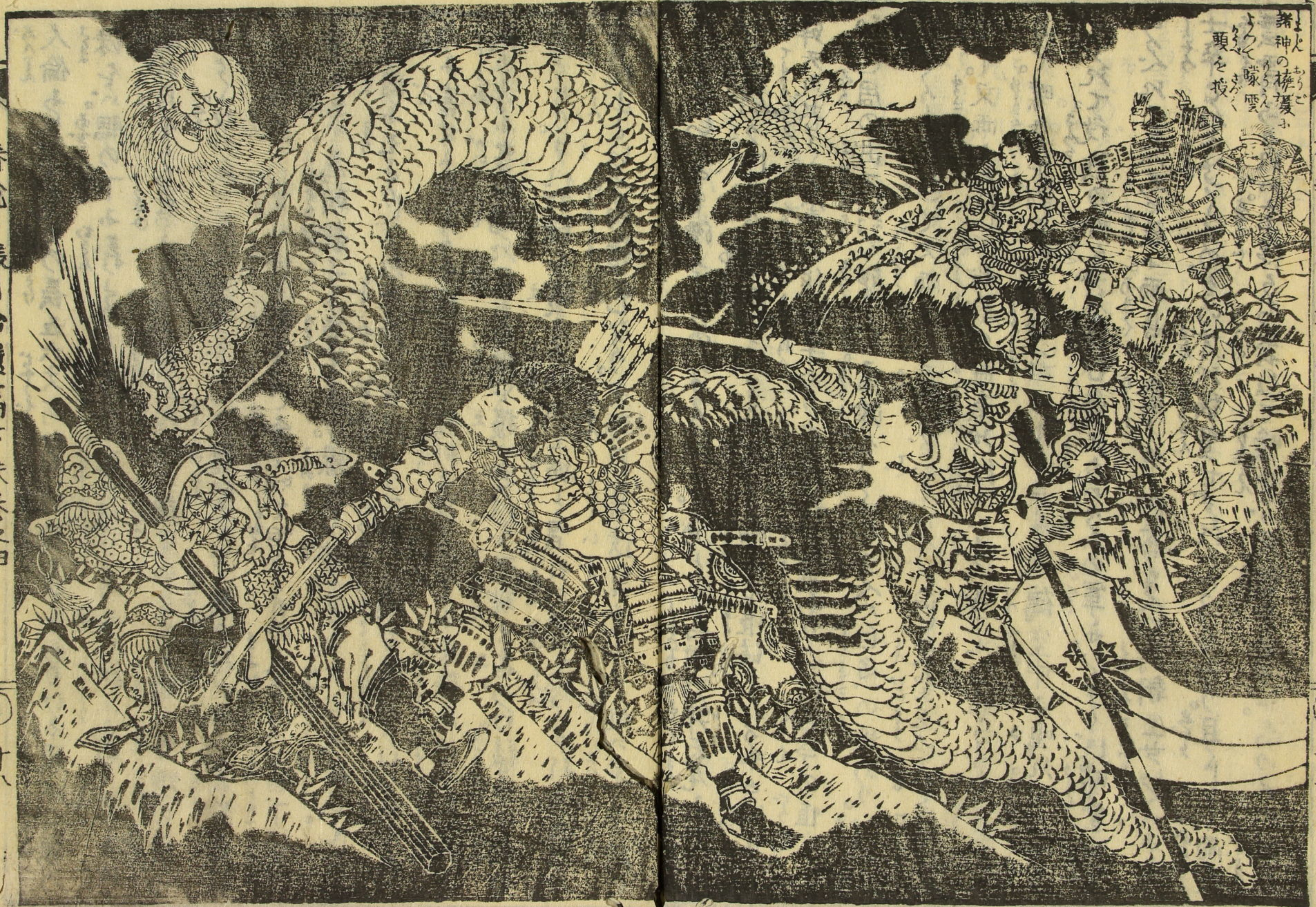
職... 黄金牌をとり... 弓と満月のごとく... 考固めて且く新念...
は忽然として白鳩... 鶴空の中... 空中...
の鳴声... 弦音高く兵と射る...
星の... 矇雲が吃碎て... 射...
馬より... 仰... 墮為朝... 馬より... 彼宝劍...
きて九刀刺徹... 怯... 首と弗と... 天候...
結陰... 四面野于玉の... 善悪も...
つる... けり。

第六十六回

龍宮城に三賢志を述
夫婦塚に兩児誕生を

の日舜天丸... 音... 兩具を... 驟... 兩降

けぐとし... 滯... のな... けり... 朝... 舜天丸...
おん... 兩降... 兩具... 准... 同...
舜天丸... 大軍の後凶... 大殺の後風... 古今の恒言...
し周の武王... 孟津... 白魚の瑞... 紂... 自
殺... 及びて... 兩盆を覆... 是化... 天聖王... 祥瑞...
示... 又兩... 殺戮の餘氣... 今や... 我兵を
りて... 矇雲... 白鳩... 鶴空中... 鳴... 又大雨降
りて... 殺戮の餘氣... 舜天丸... 軍... 矇雲...
らる... 故... 兩具を... 回... 朝王...
士卒... これを... その才... 稱... 且... 兩...
雲... 主... 後... 矇雲... 死... 雲... 元...



諸神の権援
よみて隊雲
頭を投

林語
諸神の権援
よみて隊雲
頭を投

春
鏡
子
長
月
台
遺
篇
下
決
卷
之
四

〇
十
八

〇
十
七

人倫ありあつて。その長五六丈可なり。龍あてどありける。琉球二顆の
珠をへ腮の下におろし。とて。珠の傷口より出て地上にあり。鱗を半
輪の月をもち。累々たる。凡の大船の錨見のごとく。眼は百煉の鏡の
あつ。血を装ふ盆の。全體堅くして鐵の柱の如し。衆皆これを
えて駭然と驚れ。怪之。暗をよし舌を吐て。怖る。の又多く。當下松壽の
よと出て。為朝親子。直歩を。縁故を。大古天孫氏に。め
この國も王とし。とれ毒惡の巨虻ありて。変化通力。強なる。民これ
乃。害せ。よりて。國の名を。龍虻と。り。小天孫氏。の虻を。殺て
民の。害を除。且その珠を。獲て。これを。琉球と。名づけ。後。遂。小國の
名と。され。珠を。獲る。地。王城と。唱。虻の骨を。埋。と。は。天
昔。虻山と。いふ。高嶺。是なり。天孫氏。嘗。言。と。く。虻。は。國の

大の。冠なり。子孫。奇と。好む。のありて。彼。虻。墳を。造。く。君。徳
これ。より。衰。く。ま。く。國家。と。失。く。と。り。と。り。と。り。小。琉。球。の。北。濱。る。
赤瀬。碑。石。を。立。て。後。國。難。あり。と。い。ふ。も。この。碑。石。は。新。羅
の。禍。を。脱。ぐ。悲。し。く。不。徳。の。君。國。を。失。ふ。と。及。び。て。東。方。の
日。輪。あり。朝。出。て。國。の。為。照。さ。入。勢。怯。め。と。宣。せ。は。世。の。口
碑。お。傳。へ。り。あ。り。尚。寧。王。奇。を。好。む。の。ま。り。虻。墳。に。葬。れ。禍。獸
を。招。へ。て。これ。が。あ。り。崩。れ。多。し。王。女。さ。ら。赤。瀬。の。碑。に。移。り。て。禍。獸。土。中
に。滅。せ。し。も。曠。雲。中。山。は。跋。扈。し。て。遂。に。南。北。省。を。吞。み。至。り。か。ま。こ
を。曠。雲。の。往。古。天。孫。氏。お。殺。され。り。虻。の。疑。ふ。べ。く。は。その。怨。灵。を。海
に。亡。び。て。枯。骨。十。千。載。の。後。甦。生。し。て。舊。怨。を。報。へ。る。な。り。且。天。孫。氏。の。遠
言。を。以。ひ。の。東。方。の。日。輪。あり。朝。出。て。國。の。為。照。さん。と。い

本言... 一冊... 一冊...

今日のふりなるべし八郎按司大東の皇孫日の神の後裔なり朝小出
てワガ國のふお照つひの一句小則為朝の二字こりなり。あられ天孫氏
の子孫よ代々てこの國を治めまふべし君と大將軍父子おこそと信
ぢちて古を推て今お賢一。二顆の珠を拾ひとりて為朝お進らせられむ
為朝これを受まらば世の浮説へ信トかじ。陶按司おぼしその珠預り
おぼしと守りていづれ勸進どもおぼし採りまざりけりは松寿ハカ
およぐば戦袍の袖をお離く。珠を押畏こ中て澄の上お負ねかて
為朝ハ樹を伐して薪とすし。此の軀を焼失しあお猛火の中おあり
まがら。その皮ごも焼かれ。せんまへるまへお輩取の中へ引捨させまあお
奇なるうな虬の軀を旭おむる霜のてり。忽地お腐爛れ骨もごあ
ぞ悉水となりて失すか。衆皆再び驚れ怪てその故を尋りけり。
舜天丸つくと見えまじして。このあまぐ怪しむらび。この草蛇毒液能

舜天丸つくと見えまじして。このあまぐ怪しむらび。この草蛇毒液能
その功のれハ。此の軀の解されたるべし。この國の野ある草の多きを
何といふか。んと同まら。羊老と兵士も終て縋りゆらご。といふは王女の
且く。守思して舜天丸の鑿定そのよしあり。つが良人の武徳天地成動し
まへハ。祥陽も又多く。さればこの草生おてまぐ。蛇毒を治されやあん
まへ。試まお。嚙雲お傷けられ。東紀南吉甲橋乙柚お。瘡口へ著は
て。こんよ。と宜ひて。その草を摘採して。瘡負るりのお賜る。お立地。其
瘡愈も。苦痛拭ひ去ら。が如くなれハ。皆飲ひてまじし。おれハ。海へよりの
つが。國の蛇類七種あり。蝮蝎の殊お大なるりのを羽夫と唱。頭ハ圓
あま。尾ハ短し。この毒蛇お。整るりの。おやく。活をよりて。土俗の。誓言言
お羽夫。お。整るりの。活をよりて。土俗の。誓言言

春... 長月... 合... 下... 失... 之... 日...

ハツ草の
事羽羽袴
の説本も
わけて作者
の考を載
そ

の生々々。ながく蛇毒を治せんとす。こゝに足大將軍の親子の仁徳より
てなり。いと愛しと祝し。もうせむ。朝に後よげ。ちち笑て。世の
常言。南中。死に恐る。蛇の毒。蛇とていふ。今この草の昔は
徳の致。あつた。欲する。正の國の音。の抑毒。蛇を羽夫と唱る
よ。何れ根く。あや。と。同。久。松。毒。毒。反。鼻。の轉。統。り。といふ。説
あれ。附會の言。羽羽。即この國の古言。あて。いと。回答。う。天丸
小膝。を。破。と。拍。これ。あて。あ。ひ。あ。る。こと。あり。つ。が。日。の。本。あ。の。緒。の。最。上
る。を。羽。二。重。といふ。羽羽。持。あて。蛇。皮。か。な。を。と。て。の。名。あ。え。白。柿
も。又。蛇。毒。を。解。す。の。功。あり。又。蛇。脱。の。薪。お。著。と。を。と。て。物。と。者。つ。れ。は
鍋。あ。れ。釜。あ。れ。洗。器。と。忽。地。お。破。る。り。の。こ。その。と。れ。と。や。草。設。次
焼。く。破。れ。と。れ。鍋。焼。て。舊。の。て。く。る。と。よ。く。お。よ。と。宣。ふ。お。その

ま。聞。惜。識。を。感。佩。足。より。毎。戸。上。の。草。を。植。さ。る。り。の。な。く。の。名。は
羽羽草とて。さ。る。り。の。な。く。の。朝。親。子。の。凱。歌。三。度。揚。は。て。蛇。の。頭。を。百
餘人お。扛。擔。し。あ。て。龍。宮。城。お。入。り。あ。つ。た。中。山。南。北。の。三。者。三。十。六。の。属。鳥。お
い。つ。れ。ま。で。風。を。臨。で。悉。く。降。参。と。さ。て。蛇。の。頭。あ。の。妖。賊。矇。雲。と。勝。識。て
故。會。門。の。外。面。お。を。来。さ。し。あ。つ。た。親。り。の。日。に。堵。の。ど。と。の。後。羽。羽。草。の。中
あ。つ。た。し。の。入。の。件。の。頭。を。地。お。銷。練。と。る。ぞ。不。思。識。と。る。か。つ。た。賊。乱。全。く
あ。つ。た。し。の。有。一。日。為。朝。の。松。壽。紀。平。治。鶴。龜。林。太。夫。お。と。て。有。功。の。筆。次
集。會。て。あ。つ。た。し。の。尚。寧。王。隨。弱。も。して。逆。臣。妖。賊。お。が。る。ふ。國。以。喪。ひ
ま。つ。た。し。の。今。幸。お。王。女。あ。り。つ。た。大。日。本。の。古。實。お。よ。る。と。れ。と。女。子。と
し。ど。も。民。の。父。母。と。る。べ。し。速。お。佐。お。即。と。國。お。王。あ。る。と。あ。つ。た。し。の。と
あ。つ。た。し。の。王。女。お。れ。を。あ。つ。た。し。の。顔。お。汗。と。る。席。を。避。と。る。と。あ。つ。た。し。の。と

本言... 中...

まゝえまふりのうね。まゝらと舊の王女おけり。白蓮姫の貞魂が。このまゝ
憑るはし。人もあはれり。よ。や形貌の王女ありとも。丈夫お諭。王位は即ち
天地反覆されふ似たり。り。強て勸めらる。面より自殺し。付くんと。あり
大將軍の徳高く。且先王の女婿あり。はせ。や。王位お即ちなり。ひく。
臣ホが心を安く。し。し。果て。高座を推登せんと。あ。り。ふ。
為朝と袖拂て。頭をうち。掉各位の勸を。い。が。本志の情愿。あ。ら。ん。
これ。日本の浪人。と。じ。め。り。この。國へ。推渡。て。困難。を。救。ひ。栄利。謀。る。意
は。君父の仇。を。平清盛を。怒。んと。て。木原山の宿。り。を。出。水。行。り。京師へ
赴。く。折。忽。地。風。波。は。松。を。壊。れて。士卒。悉。入。水。た。り。中。為。朝。ひ。り。この
國へ。漂。泊。し。て。寧。王。女。の。舊。恩。を。報。んと。あり。あ。ら。り。に。嫌。忌。の。由。は。年月。を

か。つ。り。や。志。を。果。と。し。他。れ。ど。遂。に。仇。人。清。盛。を。仍。好。む。と。て。この。國。の
王。と。なり。て。半。生。の。歡樂。を。志。を。移。さん。や。功。成。名。遂。て。自。退。く。あ。ら。ん。の。人
お。及。び。て。も。今。より。故。國。お。ま。え。了。新。院。の。山。陵。を。腹。う。れ。切。て。忠。臣。の。誠
を。泉。下。お。盡。さ。し。千。別。の。石。の。傍。に。とも。これ。の。心を。動。さ。せ。あ。ら。ん。び。し。ひ。あ
出。べ。く。と。言。葉。を。放。て。推。辞。する。人。の。衆。皆。彰。り。あ。ら。ん。嗟。嘆。し。の。八。師。按。司。も
謙。徳。の。君子。の。父。の。功。を。り。て。その。子。に。讓。る。例。の。如。漢。お。ま。ら。ん。加。之
礮。雲。を。射。て。お。し。ひ。の。舜。天。九。君。の。大。功。あり。臣。ホ。この。君。を。立て。國。王
と。仰。ぎ。た。り。と。衆。議。既。に。一。決。し。て。又。舜。天。九。の。名。を。り。て。高。坐。を。推。登
せんと。され。お。舜。天。九。勿。地。氣。を。妻。と。し。あ。ら。ん。あ。ら。ん。あ。ら。ん。あ。ら。ん。あ。ら。ん。あ。ら。ん。
父母。上。に。在。る。子。に。して。親。を。諭。る。の。れ。は。夫。孝。の。國。の。本。也。これ。り。位。は
親。と。諭。く。不。孝。の。子。と。なり。ん。あ。ら。ん。何。を。り。て。民。を。教。へ。ん。慢。と。か。と。ま。え。

春... 長... 合... 遺... 請... 下... 決... 卷... 之... 四... 七... 二...

しうかきくも進んたれども。父子相讓て後ひまの氣をさるるべし。紀平治班を
さくみ出陣位の工の人力をりて定めごとし。あつれども大殿日本へかへり
まらぶ。その國ゆゑび安らじ。まじし撰政して國中を治めり。王位
おのづから定むるもゆらん。後すも大功あるの勸賞行ふるや
さくみ松壽も亦班をす。出大将軍夫婦父子。まじく謙遜辞讓し
めひて。とえて王位は即ち多の。大将既母かくの如し。士卒いづるも恩賞を
臨んどもかひぬるも。といへば。松壽も又この後ふまじく恩賞の
沙汰をさめり。さうせしは。乃ちつくと左右をさて功あるを賞し。罪ある
を討ざる。せが國ハ一日も静まじ。紀平治が。いふ。つが。意は稱へり。と
宣ひて。やがて松壽を越来の按司として。兼て東風平を領し。し。鶴を
中城の按司として。も。國郡が本領。ふ。郷村數箇。処をほか。て。毛。國。郡。

と名告り。し。龜を。外祖紀平治。養ひ。八町龜と名告り。して。龍宮城
の。笛守と。し。紀平治を親雲上として。舜天丸の傳と。し。林大夫。あ。佳奇呂麻
を。ま。り。て。兼。て。小琉球。より。以南。姑采嶋。ふ。至。れ。ま。て。十六嶋。を。管。領。さ。し。
東紀南吉。堤造。紅衛甲。楯。乙。袖。丙。烈。丁。炎。春。亦。を。荒。登。之。と。し。郷村
一箇。所。つ。と。と。く。ら。あ。へ。人。王女。と。中城の。世子。殿。亦。を。ら。し。て。鶴。及。傳。と。し。
為。朝。の。大。里。へ。退。れ。て。舊。の。ま。じ。く。按。司。と。稱。し。舜天丸を。浦。添。の。按。司。と。
兼。て。源。尊。敦。と。名。告。じ。り。あ。を。は。し。を。仰。せ。り。ふ。松。壽。時。紀。平。治。時。を。兼。て。
為。朝。父。子。の。官。職。の。い。と。身。を。を。ら。し。て。せ。め。て。國。舅。の。法。司。と。も。
稱。す。し。多。く。し。と。勸。せ。ご。も。これ。を。ら。後。ひ。ま。の。氣。を。さ。る。る。べ。し。要。皆。力。あ。ま。じ。し。
く。恩。賞。を。拜。謝。し。お。の。く。為。朝。親。子。と。居。住。の。地。へ。送。り。ゆ。か。じ。て。ま。を。
お。の。が。采。地。へ。赴。ん。と。と。お。の。林。を。ま。も。身。の。暇。を。ま。り。て。佳。奇。呂。麻。へ。

舜天丸の
とく
中世港
本づく

つとて為朝ふ稟々然此度某嶋人あはれ泊の西濱へとて漕ぎ
せし兵糧船風波のなる沈没んとあはれ折漕とあはれ梅の糸を醫と
あて衣冠正し貴人う船の袖前へまゆられまて入えて風を立地再
敷れ船ともこね恙なれるをひらりこれも亦去年の後驗者ふひとしく

瀨岐院のおん使やありんいと奇しれまてふ有かれ權渡なりと物
かされ為朝政を傾けてまら太宰府なれ天満宮の水厄風難を救せ
あふがれまじり少るしとれ鏡西ふありしうの常ふ安楽寺の天満宮
縮よりけるふ有一夕の夢お菅家枕上おまゆりれて

つづくもの梅さふあふばつれとあれとらつづの外さうねそ
と吟しあふとんちひりて夢のまをり介しよこのまされ梅をえられ
かすむに拜せごとしあてふしこれあのお報なれ天満宮自在天神
と奇祀なるお寛平延喜のおん時お重用せし贈正一位大臣菅原

朝臣道真公の神冥也をいしあての神人間はあまそくし日の朝廷ふ
つてて私なく風流鹽梅の臣よりれ文筆の才古今お備さくせし
左大臣時平公お媚れ罪なくて太宰權帥お左遷せられまひしとあり
首尾の箇様とくとおちあなつ脱走しするが林太夫の感涙を禁めあへど

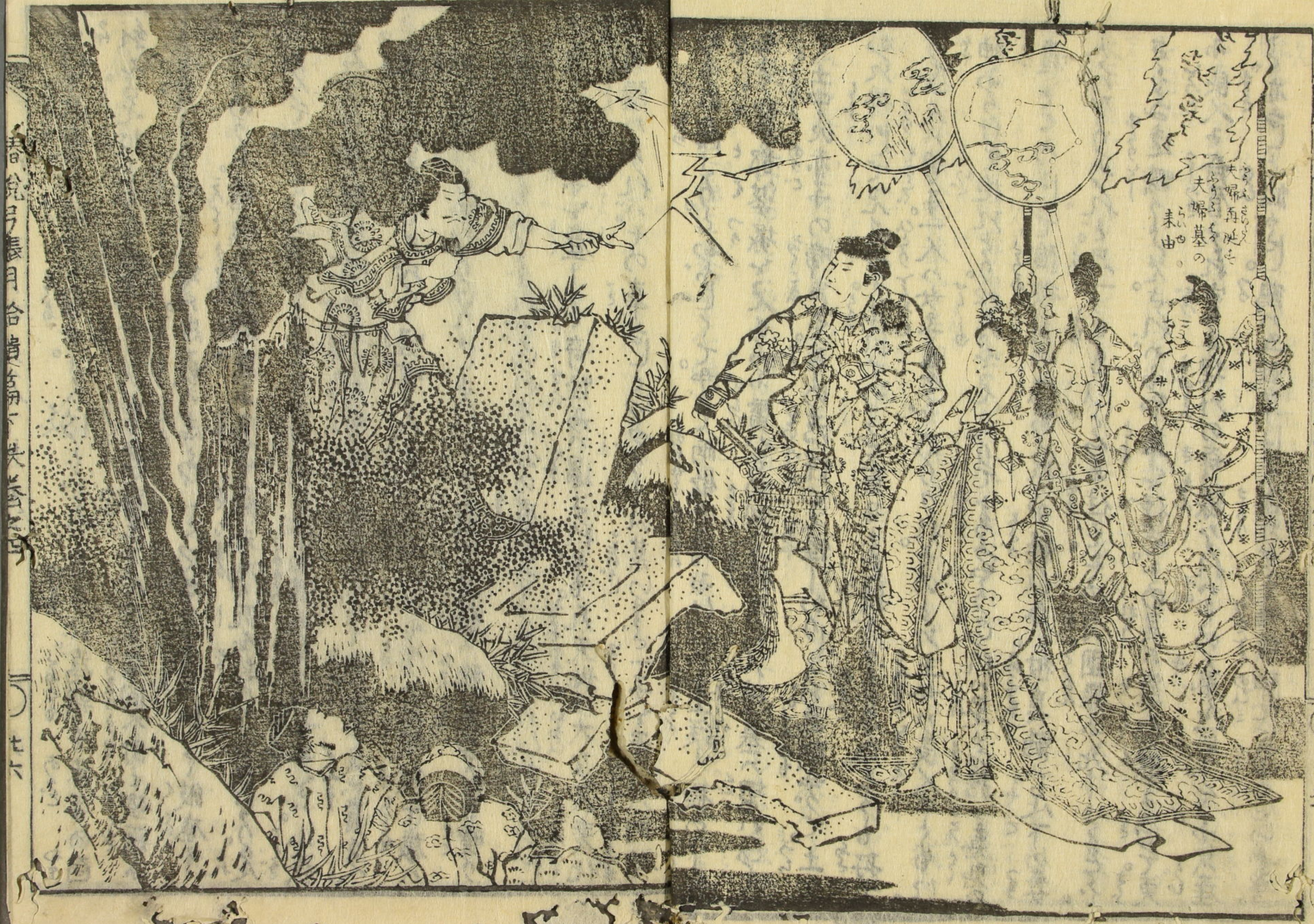
いよう信心を發しこれよりして毎且お彼崇徳院の瀨千鳥の心製と成家
の梅さふあふとれとあれの浮歌を吟はし拜しけら一年異朝へ使
いよと渡唐の船漳洲なれ梅花海めて反覆り船中の人たうの溺れ死
よりけらふ林太夫の梅の枝お携著て流れて遠お他船お助け乗れ

て故國へ帰るとおはらりかゝ再度の眞助を感佩して姑采嶋お神社を
建立て天満宮をおありりされ琉球國お天満宮をおありりなれとて

琉球の
林太夫が
天満宮の
難渡り
よりて水
厄を脱し
しと昇
かくあ
あふあ
かみまの
神泳あ
難史余論
井南嶋志
一本茶崎
を久米村
おゆら
非琉球記
あ封王
第十代尚
先王時の
おと流統
史徐論ホ

林太夫より遊ばせられたり。琉球記本づく不題為朝の大里の城へ入りてひても左
 右なるゆき多くて、秋の比ふりしる。國中を巡りて民の苦勞
 を同じ農を勸め業を激さんとて後者さふいと空妻一夫里の城を出てまづ
 天孫朝へ詣りて幣帛をさし奉りて懸て中城へ赴けり。王女次侍ひ夫婦
 りのともも廟岡へ詣りて先王尚寧の廟を拜し又廉夫人の薨るるを
 姑場に至りて叮嚀ふこれをさし奉りて余の存なれば越来山なる真鶴が
 宰都婆塚へ香華をさし奉りて件の山へ攀登せり。松壽を城を
 ゆく道次を迎へてさし奉り恩澤亡妻が枯骨ありて暨りまふこと有がた
 下ふ泰と拜謝してさし奉り先小たりて御導をさしつけられたり
 主後山を登りゆくと数十町にして雷雨降るるにしが、あつたる松の
 下ふま在てまじ霽を候るるに忽地霹靂一声震るるは、はより遠

かたに落しり。あつて雨散雲晴おければ、主後樹の下
 しく宰都婆塚と見え、雷ハこの処へ落しりけん墳墓へ壞れし
 て土中の赤子の啼声を事の為体いと怪しかりし、公為朝女が土
 かた拂いて見え、あつて生れてし、百日と経るる赤子のあつても
 一人の男子一人の女子をさし奉り、そのとれ王女の良人とともに
 袖あけて抱えたり。松壽をえりて室をさし奉り、あつて是は鬼神の
 産とて居して、陶按司の子にれる疑ひなし、彼真鶴の足下の妻
 とり、只一日もひとりの住むと、その才國難不死し、
 遠憾う見え、さればあや年を経て、その君ハ宰都婆を憑て更
 ね良人ハ奇縁なれ、實ハ理外の奇縁なれ、その氣を感て子ハ産
 し亦よしと遊ばせ、鶴ハ五百年はして遊ばせ、雌雄相見て、



春鏡月長月合時

十六

夫婦再誕
夫婦墓の
未由

林前氏張月林

十六

これのみ氣を感じて孕てさうけいんごやと云へば為朝と赤子の面
影を足彼とらち觀り。今この男女の再生と云ふ高向大郎と磯萩ふ
うく肖りの件の夫婦の忠義の志ありといへども不幸にして彼底に
沈むるは魂忽地鱈魚小馬にて舜天九死を救ひしりのなり。足
彼りて奇といふべし。よりてまの男兒と云高満と名づけ女子と云小萩
と名づけ京都婆墳と更て夫婦墳と唱へしより慈愛て養育多
之宜へん松壽も志づく嗟嘆し。某この山ふ世を潜む折彼千歳の
有身て四月やなりけしとされと千歳の真鶴魂鬼ありと曉り
て有身へらもあふんぬれま公の惑むるんとおれひ捨てぬ
土中にその子を産しと奇怪あり過されども凡天地の大なる変化
本来疆ならればその事なしといふべし。某いま一子を奉る八町磔
も子にあらざれば仰おらうて外孫と云龜を養へば羨し。現は後されば
不孝といふ憂くやひしお不思議は再生を奉して致び言語
お盡ぐし。と信やりも回答し。後者し墓の土石を舊のまじり流
されば鎮西為朝と鑿打と云鐵一ツを拾ひはかり松壽と云も是
をえて世にふ雷芥などやめらん八郎按司のおん名をえり世に
ころはびとせき。やて為朝もすかしくとされば為朝つくとえて眉
を頻めむし。これ肥洲は流浪しと云木綿山小狩らして雷獸以射
とるてあり。そのとれ箭ごとく人あざれども遂に雷獸の性方と云
原來の真鶴が墳墓と出朋してその子と出世雷公のしししが征矢
を負て木綿山の獸めて乳母子須藤を震れと云為朝が恨と解ん
とて。こふたの子と授かるる人物の因果のあはれとある世の

長月合書... 七二

物語書に由りて今更ふと云ふは須夜がと。山雄野風がこと
 ありとて顔未と告め入る。衆皆耳に側しけり。かくて為朝夫婦ハ越耳
 の城に入りて兩三日通笛一亦復之者を巡り果て小琉球に赴た赤瀬
 の碑を拜し多ゆ。為朝彼此久えりてこの処の風景よく伊豆の
 大嶋に似たりと云ふ。小琉球を更めて今ハるまで大嶋と唱へ
 亦彼赤瀬の碑ハ禍獸を怨めとればとてその一名を福家と云ふと
 名傳信録を按じると大嶋ハ中山より水行之日小連るをじ。みづら
 小琉球と稱るといふ即是なり。さう後ハ陶松壽と。おりのひもかけと
 両児をばと。飲ぶことかだうや。乳母して養育をば。いと健やうふ
 生育けり。後世揚文鳳が夫婦墳を吊詩あり。卷端画よのせり。

椿説弓張月残編卷之四 畢



